

体験で地域の四季を感じる

「まつやま塾」での体験学習の1年間



春～ソラ豆栽培・田植え

春は、新しい1年の始まり。「まつやま塾」も5月から開校します。前年度から引き続き参加する子どもたちや、新1年生や新たに加入する在校生の子どもたちも加わり、新年度の体験学習が始まります。

ソラ豆やサトウキビなどの栽培体験や、しろかきを兼ねた泥んこ体験、田植えなどを、「まつやま塾」では体験しました。

収穫したソラ豆やタケノコは、畑の横ですぐに焼いたり、湯がいたりして早速食べて、新鮮な旬の味を楽しみました。

しろかき・田植え体験では、子どもたちは全身を泥んこにして挑戦しました。今年も、田植えする苗を発芽の段階から育てることも体験し植物を栽培する喜びを体感しました。



夏～井手落とし

夏は、麻生原堰（せき）の井手落とし体験や、乙女福祉ふれあいセンターの緑のカーテン作り、顕微鏡を使った夏の植物観察などを体験学習しました。

麻生原堰の井手落としでは、農業での井手落としの意味を学習してから体験しました。子どもたちは元気よく川に入り、必死になって網ですくったり手を石の下に入れたりして魚を取り、自然の恵みの大切さを学びました。環境に関する学習の一環として、緑のカーテンを作ったり、普段見る植物などをより詳しく知るために、顕微鏡を使って観察したりする体験にも取り組みました。

秋・冬～稲刈り・稲こぎ

秋は、稲の収穫体験として、稲刈りや脱穀作業などを体験しました。

春に自分たちで田植えた稲が黄色く色づき、大きく稲穂を垂れるまでになったことを観察して、子どもたちは自分たちの手で稲刈りに挑戦しました。

刈り取った稲は、脱穀作業をする段階において、農業の歴史を学ぶとともに労働の大変さを体感するために、「千歯（せんば）こぎ」や「稲こぎ機」、「唐箕（とうみ）」などといった江戸時代から昭和初期にかけて使われていた農機具を使った作業も体験しました。

また、冬は、建物を建てる技術を学ぶ体験として、廃材などを活用したログハウス作りなどにも挑戦しました。



自分たちの手で物を作る
ことで成長する体験学習

「まつやま塾」では、昔ながらの遊びとか学校や家庭でできないことを体験学習に取り組んでいます。

どうして昔の遊びなのかというと、今の子どもたちは、自身で物作りなどをあまり経験していないからです。小刀の使い方なども知らない子がほとんどです。指先は体の感覚を成長させる大切な部位なので、自分の手を動かして何かを作るという体験が大切だと思います。

子どもたちには体験を生かして、何かの機会のために、のこぎりなどの使い方を周りに見せてほしいと思うのです。体験を通して得意分野として覚えていくと、大きくなったとき、ふとしたときに表現してほしい。それが人間としての自信になるのではないだろうかと思えます。



生き物をいただくことの
大切さを体感する農業体験

体験学習は、農業が基本という考えがあります。これは、「いただきます」の心を養うことにつながります。生き物をいただくことの大切さを子どもたちに体感してほしいのです。農業は、作ることから始まり、最後の食べることまで一貫して体験できる大きなテーマです。その中で、木の実や葉っぱな



どを活用するなど、目の前にあるものを大切に使う心を育ててあげたいと思うのです。昔の子どもは自然を活用しようと考えたけど、今の子どもたちは捨てることしか考えていない。できた物で遊ぶ感覚が強い子どもたちに、自分で作ることの大切さを伝えたいのです。

地域の皆さんの幅広い参加
でさらに充実する体験の場

地域の皆さんの協力体制が

農業は、食物を作ることから始まり、最後の食べることまで一貫して体験できる。農業を体験の基本にすえることで、生き物をいただくことの大切さを子どもたちに体感してほしい。



町社会教育指導員
金森 徹さん
(上早川三区)

なりできてきて、今年も新しい参加者が増えています。最終的には、地域の皆さんで活動できる体制ができれば理想です。そうなることで、自分たちは、ほかの学校で新しく環境を立ち上げることもできるのではないかと思っています。

生き物と食について考える
体験を通してはぐくむ心

今後の取り組みと課題は、農業関係の体験活動を、もう少し充実させたいと考えています。

生き物と食について、きちんと関連付けて、子どもたちに分かりやすい体験の場を設けて伝えたいと思います。

来年は、アイガモ農法にも取り組もうと計画しています。アイガモとともに米を作り、最後にアイガモをどうするかについて子どもたちに疑問を投げかけてみたいと考えています。そのときに、子どもたちなりに、生き物と食について一生懸命にどうしたらいいかを考えてくれたらいいなと想像しています。

